

中国を嫌いな人が日本で8割を超えていると報道されました。正直に言えば、私も今の中国政府に好感は持っていません。中国政府が正当な行為と主張する、少数民族への弾圧に代表される人権侵害は承伏できないからです。また多くの日本人は、日本に対する外交的態度も気に入らないと思っているでしょう。同じように韓国の印象も悪化して、国内では在日韓国・朝鮮人へのヘイトスピーチに発展しています。

でも同時に自国の政府に疑問を感じている中国や韓国の人々が私の周りにもいます。尖閣諸島を巡って反日運動が高まった時に、中国で使われている携帯に日本の

技術や部品が多く使われていることを中国の親族や友人に語り、日本への嫌悪感は意味がないことを訴えた留学生もいます。韓国の現政権は変だと語る韓国の友だちも多くいます。もちろん、日本を嫌いな人も中国や韓国にはいますし、中国や韓国で嫌な思いをした日本人もいると思います。

しかし、国家(政府)の考えが、全ての国民の考えでは当然ながらありません。日本も同じです。前政権時代、その対外政策を批判した人もいましたし、現政権を批判する人もいます。

他国への声高な批判を聞くと、この当たり前のことが忘れられていると思います。その当たり前のことを思い出させてくれるのが、顔の見える関係です。中国や韓国に顔の見える関係を築いている人は、国家間が揉めていても「(政府のような)そんな人ばかりではない」とすぐに思います。だからこそ、顔が見える関係が重要です。私は中国政府を批判しても、簡単に中国が嫌いだとは言えません。顔の見える関係をつくる、多文化共生もそこから始めてはどうでしょうか。

文: 県立広島大学 上水流久彦 講師

イラスト: 県立広島大学 ロナルド・スチュワート 准教授

2015(平成 27)年 広報あきたかた 3月号掲載

